



SANTIAGO KUMANO

世界人類遺産の巡礼道

この巡礼に関する展覧会は、ガリシア州のサンティアゴ・デ・コンポステーラ市と、和歌山県の田辺市とが共同で行っている観光プロモーションの一環として開かれるものです。両市の共同プロモーションは、2008年に、千年紀の巡礼の道である「熊野古道とサンティアゴ巡礼の道」の存在と価値を、世界的な規模で知らしめることから始まりました。また、その起源は、1998年に、ガリシア州政府と和歌山県庁がこれらの巡礼の道を基軸にした「姉妹道協定」を結んだことによります。

サンティアゴ・デ・コンポステーラ市と田辺市は、どちらもユネスコにより「世界遺産」に登録された巡礼道の聖地を持つことによって特徴づけられます。また、どちらの巡礼の道も、その起源は10世紀頃であり、今日までの何世紀もの間に渡って、何百万、何千万という巡礼者たちがその歴史を作り上げてきました。しかし、この両地の巡礼の起源の時期がほぼ同じだということだけでなく、それ以外にも以上に多くの共通点が見られます。巡礼の精神的、巡礼のシンボルや巡礼道を取り巻く景観などにも似通った点が見られます。また、食文化においても共通した点があり、両地が豊かな海と大地に囲まれていることから、魚介類などを中心として、昔から非常にバラエティーに富んだ食材が存在しました。

今から何百年も前、これらの巡礼道が、多くの人々たちによって崇められるようになっていた時代は、日本は、「日の出ずる国」として周辺の国々に知られており、一方、日本から見て世界の西の果てにあるイベリア半島のガリシア地方は、「日の沈む土地、終焉の地」として知られていました。これら、東の果てと西の果てにある巡礼道が、お互いの存在を知らずして、共通の要素である「信仰」というものを基にした歴史を作り始めていたのです。

2013年6月の日本国皇太子殿下のサンティアゴ・デ・コンポステーラへの訪問と、巡礼道を巡礼者としてお歩きになった経験は、ガリシア州と和歌山県のふたつの巡礼道の友好関係をさらに発展させることに繋がりました。

また、この皇太子殿下のサンティアゴ・デ・コンポステーラへの訪問は、「慶長遣欧使節」が400年前に仙台藩からヨーロッパへ送られたことを記念する「日西友好の年」に行われる行事の中でも、ガリシア州にとっては、最も大事な行事になりました。

巡礼の起源

千年以上もの長い年月をかけて、サンティアゴ巡礼の道は、非常に多くの巡礼者たちを、キリストの使徒のひとりである大ヤコブの眠る土地へと導いてきました。このサンティアゴ巡礼の起源は、9世紀にさかのぼり、今日のサンティアゴ・デ・コンポステーラ市の近くで聖ヤコブの墓が発見されたことによります。このキリスト教世界における偉大な発見については、後の12世紀に編纂された「カリストゥス写本」にも記載されています。それによると、聖ヤコブが、紀元44年頃にパレスティナで斬首され、その後、ふたりの弟子たちによって、石の舟に載せられて大海に繰り出し、大西洋から川を上ってイリア・フラビアという村(現在のパドロン)に着いたとされています。そして、弟子たちは、聖ヤコブの棺をリブレドンの丘(現在のサンティアゴ市郊外)に埋めたということです。その後、聖ヤコブの棺については、何世紀もの間忘れられていました。しかし、紀元813年頃のある夜、降るような星のもとに発見されたと書かれています。その地に、聖ヤコブを祀る礼拝所が建てられ、その周囲に、コンポステーラの町が築かれていき、ヨーロッパ各地から巡礼者が訪れるキリスト教の重要な聖地となりました。聖ヤコブのことをスペイン語でサンティアゴということから、この地への巡礼は、「サンティアゴ巡礼」と呼ばれるようになり、中世の時代には、巡礼者のもとより、商人や学識者、さまざまな文化や思想が行き来する道に発展しました。サンティアゴ・デ・コンポステーラの町は、このような歴史によって造られたので、その巡礼の道とともに、ユネスコにより「世界人類遺産」として登録されることになりました。

「熊野古道」の信仰は、巡礼のルートを取り囲む大自然への畏怖と尊敬にその起源が求められます。古代から、紀伊半島の山々や森林、河川や滝には、神々がおおすと信じられてきました。熊野の土地は、京都や大阪から見ると紀伊半島の南の方にあたり、日本の起源として考えられている多くの伝説の発祥の地です。仏教がインドから中国を経て紀元6世紀頃にこの熊野の土地へ入ってきたとき、それまでの唯一の日本の宗教であった神道と合体し、「神仏習合」という非常に特異な性格の宗教世界を作りあげ、今日にまで至っています。「熊野三山」と呼ばれる3つの重要な聖所ができ、9世紀以降、「熊野古道」を巡礼する人たちの訪れるべき大社となっています。以来、代々の上皇を始め、多くの貴族たちから平民たちまで、大挙して紀伊半島の聖地を巡礼するようになりました。



日の出ずる国 / 日の沈む国

「サンティアゴ巡礼」は、聖ヤコブを祀るサンティアゴ・デ・コンポステーラの大聖堂にお参りをするのがその目的ですが、巡礼が盛んになった中世の頃から、それより西の「フィニス・テラエ」を目指して歩き続ける巡礼者が現れるようになりました。この大西洋を望む岬は、古代ローマ人がこの辺りに駐屯していた時代、水平線の彼方に燃えるようにして沈んでいく太陽を見て懼れを抱き、「地の果て、終焉の地、死を迎える土地」として知られていました。また、キリスト教がこの辺りに広まる以前、太陽を崇拜する習慣もあったと言われ、紀元前後にこの土地に住んでいたケルト民族系の住民たちは、太陽を崇める儀式を行っていたということです。つまり、この「地の果て」と言われる岬を訪れる習慣は、キリスト教とそれ以前の自然信仰が融合されたことにより作られた一種の巡礼と言えます。今日でも、サンティアゴ・デ・コンポステーラを訪れた巡礼者たちの何人かは、「フィニステレ岬」と呼ばれる西の果てまで歩き続けることにより、人間としての蘇生感のようなものを味わうことができると言います。岬に到着した巡礼者たちは、岬の突端から大西洋を眺めたり、神秘の海と呼ばれてきたこの辺りで泳いで心身を浄化させたりします。

紀元10世紀、日本という国は、「日の出ずる国」として西洋世界に知られ始めていました。日本の起源について説明している日本書紀などによると、「熊野」とは、「死者たちの眠る神秘の土地」として記述されているそうです。これらの死者たちは、太平洋から来て、紀伊の山々の奥深くに入って行ったということです。「熊野信仰」においては、「熊野三山」にお参りすることは最も大事なことです。この辺りに多く存在する温泉に浸かることにより、心身ともに浄化することも大切な巡礼のひとつです。



巡礼のルート

10世紀以来、サンティアゴ・デ・コンポステーラへの道は、主にアつのルートにより構成されていきました。「巡礼初期の道」と言われるルートは、アルフォンソ2世が、オビエドからサンティアゴへ行くのに使用していた道がもとになっています。「北の道」と呼ばれるルートは、カンタブリア海の野性的な海岸線沿いをつたうもので、歩くのには非常に困難なルートですが、イベリア半島がイスラム教徒に占領されていた時代は、この辺りは比較的安全だったので、時間がかかっても確実に聖地に着きたいと願う多くの巡礼者たちが選んだ道でした。また、イスラム教徒を追放することに成功した数度のカトリック教徒の王フェルナンドと女王イサベルは、ナバラ、カスティージャとレオンを結び、サンティアゴ・デ・コンポステーラへと続くルートを築き、これが現在で最も巡礼者の多い「フランスからの道」になります。このルートは、1139年に、ローマ教皇カリストゥス2世が編纂した「カリストゥス写本」のサンティアゴ巡礼の記述により、さらにキリスト教世界に知られるようになりました。この写本の第5巻が、サンティアゴ巡礼についての記述で、巡礼の歴史における最初のガイドブックとも言われています。そこには、フランスからサンティアゴ・デ・コンポステーラまでのいくつかのルートについての説明があり、巡礼者に対して、行く先々の様子や巡礼する際の注意点、アドバイスなども書かれています。また、「ポルトガルからの道」も、中世以来、多くの巡礼者が通ったルートです。「イギリスからの道」は、北方から船でやって来た巡礼者たちが築いたルートで、現在のア・コルーニャ市やフェロール市から上陸しました。「銀の道」と言われるルートは、古代ローマ人の作った道を利用したもので、イスラム教徒追放後のイベリア半島南部とガリシア地方を繋げる重要なルートです。

「熊野信仰」の歴史においては、10世紀頃には「熊野三山」という聖所が確立され、「熊野本宮大社」、「熊野速玉大社」及び「熊野那智大社」が、「熊野古道」における最も重要な神社として位置付けられました。その後、それら三大社を詣るためのルートが作られました。それらのルートのうち、多くの上皇たちは、京都から大阪を通り紀伊に続く道を好みました。また、同じ紀伊半島の三重県にある有名な「伊勢参り」については、京都から伊勢の神社へ続く半島東部を通り、その後、熊野三山へ詣るというルートが作られました。最も過酷なルートは、「小辺路」と呼ばれる道で、高野山から熊野本宮大社へ通じる険しい山々を通るものです。この道は、多くの山伏たちの精神及び肉体の修行に使用されてきたものです。それ以外に、高野山から半島南部を目指す「高野山町石道」や「大峯奥駈道」もあり、やはり険しい山々を越えなければなりません。熊野信仰を布教してきた宮司や高野山の僧たちは、16世紀から18世紀にかけて、実に積極的にその信仰を日本全体に広めることに努めました。大自然の中を巡るこれらの熊野信仰の巡礼道は、日本の精神文化の形成に強い影響を及ぼし、今日、その歴史的・精神的価値が再認識され、改めて多くの人々を弾き付けることになっています。



巡礼のシンボル

「サンティアゴ巡礼」にまつわるシンボルにはさまざまなものがあります。例えば、代表的なものには「星」があります。「天の川」を見ながら西に向かって歩くと、大西洋に近いガリシアのサンティアゴ・デ・コンポステーラへ到着することができます。20世紀の現在では、最も人気のある「フランスからの道」の要所に「黄色い矢印」が描かれているので、ほとんど迷うことなく聖地を目指することができます。この黄色い矢印は、エアラス・バリニャという神父が、巡礼者たちが迷わないように手描きで描いたのが始まりです。また、聖ヤコブを表す帆立貝の貝殻も、サンティアゴ巡礼の重要なシンボルです。サンティアゴ巡礼が確立され始めた中世の時代、帆立貝の殻は、「地の果て」と呼ばれていた「フィニス・テラエ」(現在のフィニステレ岬)の海岸辺りで採られたものとされ、この辺りは、紀元1世紀に聖ヤコブが布教をしていた土地だということで、この使徒のシンボルになっています。また、聖ヤコブにまつわる伝説のひとつに、この使徒の遺骸を載せた石の舟がポルトガル沿岸から大西洋に転落し、しかし、その騎士が海岸に辿り着いたとき、体が帆立貝の殻でびっしりと覆われていたといえます。このような伝説が語り継がれ、中世以来、巡礼者たちは、サンティアゴの町の「コンチュエイロ」(帆立貝の殻の意味)という地区で作られていた貝殻のお土産を買うのが習慣でした。自然のままの貝殻もありましたが、銀細工などでできた高価なものもありました。帆立貝の貝殻をモチーフにした飾りを付けた巡礼者たちから物を盗んだりすることはキリスト教世界では、非常に重い罪として考えられていたので、帆立貝もしくはそれを模した物を身に付けることで、道連れなどからも守られるようになりました。聖ヤコブを表す他のシンボルとしては、「サンティアゴの十字架」というデザインが巡礼道沿いやさまざまな聖所に見られ、剣に百合の花が3本重ねられています。

「熊野信仰」の最も重要でよく知られているシンボルは、脚が3本ある「八咫鳥」です。この神秘的なカラスは、人間界と精神世界を繋ぐ動物です。伝説によると、神武天皇が熊野詣でに行く際、天から案内役として遣わされたと言われています。また、八咫鳥は、「賀茂県主」家の先祖である「賀茂建角身命」の生まれ変わりだとも言われています。そして、その「賀茂建角身命」は大きなカラスになって、天から村人たちを導いたと言われています。その他、熊野の歴史上人物としては、現在の田辺市辺りの出身で歴史上非常に有名な弁慶がいて、ひとりで999人を刀で切ったと言われる豪傑の僧で、熊野のシンボリックな人物と言えます。弁慶にまつわる芝居や物語は数多くあり、それらの芝居は、田辺市の祭りでもよく演じられます。さらに、熊野にあるそれぞれの神社の「鳥居」も、それ自体が神道のシンボルであることから、熊野信仰における重要な聖所を表わすものとして考えられています。特に、熊野本宮大社の鳥居は、おそらく日本でいちばん大きなもので、そこをくぐる、そこから先は神々のおおむす聖なる場所だということ世に知らしめています。



ガリシア州のサンティアゴ・デ・コンポステーラと和歌山県の田辺市は、2013年から2014年にかけて実施されている「日西交流400周年記念事業」の一環として、ユネスコ世界人類遺産として登録されている両地の巡礼道に関する写真展を開催するものである

SANTIAGO KUMANO

世界人類遺産の巡礼道



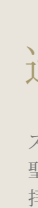


巡礼者の服装

「サンティアゴ巡礼」における中世の時代の巡礼者の服装については、その多くが、聖ヤコブ自身が巡礼者の恰好で絵画や彫刻に表されている服装を模している。巡礼者の服装で最も基本的なものは、まず、杖と肩を覆うケープ、そして、帆立貝の貝殻を付けた大きな帽子でした。この貝殻を付けた帽子については、前述の中世の巡礼ガイドブックとも言える「カリストゥス写本」にも記載されています。そこには、巡礼行でも人生のうちにおいて、できるだけ良い行いをするということをすべきたと書いてあります。また、杖の高い位置には水を入れるための瓢箪を下げ、肩から掛けた鞆には、旅に必要な物を入れていました。特に重要な物は、巡礼者の証明となる巡礼者手帳の「クレデンシャル」で、そこに、行く先々の宗教施設や巡礼者保護施設などで、印を押してもらいました。今日行われている巡礼では、巡礼者が最も重要視するのが、登山用の歩きやすい靴です。そして、重い荷物を運ぶためのリュックの質も大事な点です。いずれにしても、帆立貝の貝殻と杖は、巡礼者にとって欠かせないものです。

熊野詣でをする巡礼者の彫刻。熊野本宮大社蔵。

熊野詣でが始まったのは平安時代ですが、多くの上皇や貴族たちがこぞで巡礼をするようになったことで、紀伊半島への巡礼は一般庶民にも広がりました。それにつれて、その服装にもいろいろな工夫が凝らされるようになりました。今日でも、中世の時代の熊野詣でを思い起こすために、貴族たちが身に付けていた衣装を模した着物で歩く人もいます。特に、女性の着物は非常に特徴があり、全体的にゆったりとしたもので、大きな笠を被り、そこから顔を覆う薄い布を長く垂らしています。11月3日には祭りがあり、中世の上皇や貴族たちの熊野詣での行列を表現したものが見られます。

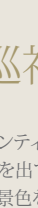


巡礼の精神性

スペインでは10世紀に、ベネディクト派の聖パーゴ・デ・アンテアルタス修道会と聖マルティニョ・ピナリオ修道院によって、聖ヤコブの遺骸を埋葬し祀るための礼拝堂が現在のサンティアゴ・デ・コンポステーラに建てられ、巡礼者が訪れるようになりました。これら3つの宗教施設は周囲を壁で囲まれ、その周囲に町が形成されていきました。それにつれて、町を囲む壁にある門の付近には、修道士たちが集まって宗教活動を行うようになりました。1214年に、聖フランシスコ修道会、1220年には、ドミニコ会ポナバル修道会が創設され、さらに1260年には、聖クララ女子修道会ができました。終身制でない修道会については、外界と接触することが許されているので、それらの修道士たちは、献身的にサンティアゴを訪れる巡礼者たちの保護や世話をしたり、修道院に宿泊させたりしました。さらに、これらの修道院では、学問が積極的に行われ、後のサンティアゴ・デ・コンポステーラ大学の前身となるベネディクト派の学府が1945年に設立されました。以上のような宗教的動機による数々の建築物の建設の結果、現在21世紀に見られるようなサンティアゴの街の景観を形成して이었습니다。しかし、何と言っても、この聖地の歴史の上で最も重要なことは、何世紀もの長い時間をかけて培われてきた敬虔の精神でしょう。今日のサンティアゴの街は、五百年以上もの歴史を持つサンティアゴ大学と、千年以上の月日をかけて築かれてきた巡礼の歴史によって成り立っています。

熊野詣でをする巡礼者の彫刻。熊野本宮大社蔵。

熊野詣の精神性とは、巡礼者が歩いていく道の周りに広がる大自然との融合に基づいて培われてきたと言えます。何百年もの年月を経た鬱蒼とした杉などに覆われた山々には、古代から、亡くなった人たちの霊が住み着いていたと考えられていました。また、紀伊半島の内陸西側には、弘法大師が開いた真言宗の「高野山」が存在し、日本の仏教界の中でも、京都の比叡山と並んで重要な聖地となっています。これらの千年紀を越える神仏習合の聖地である紀伊半島には、さらに、大小様々な副次的神社仏閣も数多く存在し、中には20センチほどの小さい地蔵なども見ることができます。このような地蔵は、懸掛けをしています。これは小さい子供の姿と言われ、しかしその役割は、巡礼者たちを守ることだと言うことです。これらの神仏習合の聖地には、山伏と呼ばれる修験者たちがいて、彼らは、巡礼者たちの案内役も務めていました。山伏たちは、グループを作り吉野や大峯のような険しい山地で修行することによって、肉体的な強さど悟りを得ることができたそうです。一方、熊野川という川が紀伊半島を流れています。これも巡礼ルートのひとつで、世界遺産に指定されています。ユネスコにより認められた世界で唯一の水上巡礼ルートです。

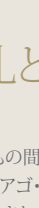


巡礼道沿いの景観

サンティアゴへの道を歩く巡礼者たちは、荒涼としたカステージャ及びレオン地方を出てガリシアへ入ると、霧の中に佇む鬱蒼とした森や低い稜線の山々が連なる景色を見て、ここがそれまでと異なる性格の土地であることに気付くでしょう。サンティアゴ・デ・コンポステーラ市の郊外に近づくまで、このような景色が見られます。セブレイロ峠からしばらくの間は、山間を歩いて行くので、決して楽な道ではありません。でも、時折、緑豊かな草原が広がり、巡礼者たちをほっとさせます。この辺りの民家の屋根は、土地で採れる黒いスレート板で作られています。サンティアゴに近づくにつれ、それらは煉瓦に変わっていきます。ガリシアの土地には、至るところに川や湖があり、どこかで水の音が聞こえ、中世の時代から巡礼者たちのオアシスになっています。また、ガリシアは、花崗岩が多く産出する土地ですが、これらの石が、建築物や彫刻の形になって巡礼沿いのあらゆる場所で見られ、あるいは、巡礼者たちが自ら運んできた、小さい花崗岩の石が積み上げられているのときおり見られます。サンティアゴの街も、この花崗岩でできています。巡礼者たちが街に入ると、花崗岩を積み上げた建物と建物の間に、美しい庭園などが見られ、疲れた心身が休ませられます。このような環境整備も昔から行われていることも、この街が世界的に有名な場所であること理由のひとつです。昔は修道院の畑であったポナバル公園や、街の中心にあるアラメダ公園には、百年以上の太い樫や杉があります。また、椿やマンゴーブ、紫陽花などの花々もそれぞれの季節に美しい姿を見せてくれます。もし、巡礼者が、フィニステール岬から歩き始めたとしたら、サンティアゴの街の聖ロレンソの樫の森とサレラ川のせせらざぎ、その巡礼者を迎えることでしょう。

熊野詣でをする巡礼者の彫刻。熊野本宮大社蔵。

ガリシアの入り江と似たような海岸線を持つ紀伊半島西部、海嶺が豊かに生育する一帯から熊野川をさかのぼり、次第に山間に入って行くと、50キロほどの距離しかないにもかかわらず、その景観は驚くほど変化します。川を上っていく間に見られる周囲の景色は、山野、谷、田圃、杉の森林、そして、それらの緑の風景に彩を添える紫陽花や椿は、ガリシアの人々には北スペインを思い起こさせます。もともと、この土地をいばん良く表現しているのは、桜の木でしょう。何万本という桜の木に薄いピンクの花が咲くと、それらの下では花見が催されます。この習慣は、平安時代に貴族たちが、非常に短い時期しか見ることのできなこの花を崇めるために始まったと言われています。桜は、人生を象徴したものと考えられ、その花の姿が純潔さと簡素であることが、そのように生きることが良しとされてきました。洪水のために1890年に移築された本宮大社の周囲の森林も一見の価値のある千年紀の森ですが、日本で一番高い那智大社の滝もまた自然が作った素晴らしい芸術作品です。そして、新宮速玉大社の800年以上の樹齢の神木や巨大なごびき岩などは、現世界の起源とされる神秘的な存在です。



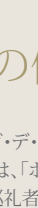
巡礼と食文化

熊野詣でをする巡礼者の彫刻。熊野本宮大社蔵。

何世紀もの間、聖ヤコブの眠る土地を目指して苦しい巡礼行を行ってきた人々は、サンティアゴ・デ・コンポステーラによく着くと、ここでは美味しいガリシア料理でもてなされました。中世の時代、巡礼者たちは、巡礼街道沿いの修道院などで食事を取ることができました。サンティアゴの街では、聖フランシスコ修道院で、温かいチョコレート、聖マルティニョ・ピナリオ修道院では昼食、ポナバルの聖ドミンゴ修道院では夕食を取るのが習慣でした。フランコ通り(巡礼の道を歩いてきたフランス人たちの意味)では、ワインやイシガが振舞われていました。今日でも、この通りには数多くのレストランやバルがあり、大西洋で採れた新鮮な魚介類が店のショーウィンドーに並べられています。これらの店の前では、一日中、ガリシア料理のいい匂いが漂っています。アバストの市場へ行くと、あらゆる種類の魚介類や肉類、新鮮な果物や野菜が売られています。また、昔の王立巡礼者保護施設であった今日のパドール「オスタル・ドス・レイス・カトリコス」では、毎日、巡礼証明書「コンポステーラ」を持った巡礼者たち10人ほどに、朝食、昼食と夕食を無償で提供しています。聖地サンティアゴ・デ・コンポステーラにある無数のレストランで、ガリシアの伝統料理や斬新な料理を楽しむことができます。魚介類の盛合せや、シンプルな魚の鉄板焼き、牛肉の煮込み、塩漬け豚、チョリソ、エンパナーダ(ガリシアのパイ)、フレッシュ・チーズ、そしてそれらの料理をさらに美味しくさせるワインには、アルバーニョの白ワインがあります。料理の終わりには、アーモンド・タルトのタルタ・デ・サンティアゴがいいでしょう。

熊野詣でをする巡礼者の彫刻。熊野本宮大社蔵。

熊野古道では、日本料理の中でも、新鮮な山海の食材を豊富に使った料理が振舞われています。太平洋の黒潮が流れる紀伊半島の南部で採れた新鮮な魚介類は、非常に質の良い、またバラエティーに富んだものです。田辺市では、巡礼者たちは、シラスやめはり寿司などを楽しむことができます。また、南高梅の梅干しは、非常に貴重な食材のひとつです。一方、紀伊半島内陸の山間部では、様々な山菜や狩猟で採れた肉類が食されます。これらの土地を訪れる人たちは、丼物のようなシンプルな家庭料理から、高級旅館で出される何種類もの美しい会席料理まで楽しむことができます。そして、この辺り一帯は、質の良い温泉が数多くある中で、ゆっくりと温泉に浸かりながら旅をすることができます。これらの旅館では、働きの女将たちが美しい着物を着て、朝早くから夜遅くまで、訪れる人たちをもてなしています。



巡礼の儀式

熊野詣でをする巡礼者の彫刻。熊野本宮大社蔵。

サンティアゴ・デ・コンポステーラの大聖堂で行われている宗教儀式の中で、最も有名なものは、「ボタフメイロ」でしょう。中世時代に始まったこの大香炉の儀式は、実際には、巡礼者たちが、大聖堂内の回廊などに寝泊まりしていたため、体臭や病気を防ぐために行なわれていたそうです。この大香炉を引くには、「ティラボレイロ」と呼ばれる8人の大人の男性が必要で、大聖堂の中央祭壇上に大香炉を釣り上げて、左右に振られます。数分間しか行われなこのボタフメイロは、しかし、翼廊を左右に17回行ったり来たったりして、最高速度は時速68キロにも及び、天井に触れそうになります。また、その他の宗教的な習慣としては、巡礼者たちは大聖堂に着くと、まず、聖ヤコブの像の肩に手を触れてお参りをし、その後、地下に安置してある聖ヤコブの遺骸の入っている銀の棺を拝みます。

熊野詣でをする巡礼者の彫刻。熊野本宮大社蔵。

熊野詣においては、その起源の頃から行われている「みそぎ」という入水の儀式がよく知られており、巡礼者たちは川で心身を清めていました。「温泉」に入るという習慣は、日本全国、温泉の湧く土地ではどこでも行われてきましたが、特に熊野の土地では非常に古い習慣で、その温泉の湯は、非常に質の高いものとされています。紀伊半島に存在する数ある温泉地の中で、「湯の峰温泉」は、日本で最も古いものだと言われています。熊野におけるその他の儀式としては、「餓鬼阿弥」に花を捧げ、湯の峰温泉で湯治することで蘇生した小栗判官の伝説を思い起こします。熊野本宮大社のある辺りは、古代から神々がおおす土地として知られていました。そのような場所が、歴代の天皇や上皇たちの詣でる場所として有名になり、千年紀を越えた現在でも、多くの巡礼者や観光客が訪れる場所となっています。



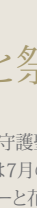
巡礼者

熊野詣でをする巡礼者の彫刻。熊野本宮大社蔵。

カトリック教世界では、1122年に、聖ヤコブを祀る年(聖ヤコブを祀る日7月25日が日曜日に重なる年)というものが当時のローマ教皇により制定され、その後1179年に、「聖ヤコブを祀る年にその大聖堂を訪れる信者たちには恩赦が適用される」という制度が作られました。このため、キリスト教世界に属するあらゆる国から、信者たちがこぞでサンティアゴ・デ・コンポステーラ大聖堂を目指して歩くようになりました。また、カトリックを信じる王族や貴族たちも、お供の者や兵士たちをたくさん連れて、ヨーロッパの西の果てにある聖地に巡礼するようになりました。中には、「代理巡礼」をする者も現れ、それで生計を立てている者もかなりいたということです。封建制度の中で、王族や貴族に従わなければならない人々も、サンティアゴへの巡礼の旅に出ることによって、「町」に住む自由を得ることができました。しかし、14世紀にヨーロッパを襲ったペストや、16世紀に起こった宗教戦争などにより、その後、サンティアゴへの巡礼者の数は減りますが、今日、サンティアゴ巡礼は、あの意味で、社会的現象と言われるほど、世界各地からの巡礼者や観光客を引きつける聖地となっています。

熊野詣でをする巡礼者の彫刻。熊野本宮大社蔵。

熊野詣も、サンティアゴ巡礼と同じように、最初は、上皇や貴族たちなどが積極的に行ってことで、一般庶民に広がっていきました。中世の文献によれば、宇多天皇が、907年に最初に熊野詣を行ったということです。その際、200人ほどの御付を連れ、京都からおよそ一か月をかけて熊野三山の聖所を巡礼しました。熊野の鬱蒼とした山々は、巡礼者たちを広大な自然の中へ取り込み、それらの場所に存在する神々との接触を可能にしました。また、最初に熊野に詣でた上皇や貴族たちの霊にも曹烏したと言えます。本宮大社と速玉大社の間のは、上皇や貴族たちは、熊野川を使って移動することを好みました。船上では、優雅な音楽が奏でられ、緩やかに巡礼が行われていた一方、御付の者たちは、狭く険しい道を延々と歩いて行きました。その後、サンティアゴ巡礼と同じように、熊野詣にも衰退期が訪れます。しかし、17世紀になると、熊野詣を行うことによって、来世は素晴らしくなるという教えが日本全国に広まり、またこの辛くも難い巡礼行が復興したのでした。



大 伝統芸能と祭り

熊野詣でをする巡礼者の彫刻。熊野本宮大社蔵。

スペインとガリシア州の守護聖人でもある聖ヤコブを祀るいくつかの祭りの中で、最も重要で有名なものは7月の後半に祝われます。7月24日の夜、サンティアゴの大聖堂は、光と音のショーと火花で、大変な盛り上がりを見せ、オブラディオ広場には何万人もの人々が集まります。そして、翌日の25日が聖ヤコブを祀りなので、この日には、スペイン王家が参加する特別なミサが行われます。この祭りの前後数日間は、旧市街の通りや広場で、あらゆる種類のコンサートが開かれ、パフォーマンスやガリシアの伝統舞踊も見られます。7月25日の聖ヤコブを祀る日が日曜日に重なる年が、「聖ヤコブの年」であることから、6年、5年、6年、11年という周期でこの特別な年が回ってきます。最後に祝われた2010年の後は、2021年です。12世紀に、ローマ教皇によって特別な恩赦の権力を与えられたことで、この大聖堂を「聖ヤコブの年」に訪れるカトリックの信者たちは、全ての罪が許させて恩赦が得られます。1611年の文献には、この「聖ヤコブの年」の前年の大晦日に、キンターナ広場側にある「聖なる門」が開けられると記載されています。

熊野詣でをする巡礼者の彫刻。熊野本宮大社蔵。

熊野詣においても、毎月のように伝統芸能の紹介や祭りが繰り返られています。新年の初詣は非常に大切な神道の行事であり、春先の梅の花見も、桜の花見に劣らず、古来からあらゆる人たちに親しまれた行事です。さらに、春の祭りは非常に有名で、4月に祝われます。この祭りでは、男性たちが伝統的な衣装を着て、神輿を神々がおおすとされる大斎原まで担いでいきます。その他の祭りでは、「熊野本宮大社の八咫の火祭り」や、名勝と言われる滝で有名な那智大社の「那智の火祭り」などに代表される火祭りが、半島各地で行われます。サンティアゴ・デ・コンポステーラ市が、聖ヤコブを祀る日を祭日として様々な行事を行うように、田辺市でも、7月の24日と25日は「田辺祭」が盛大に祝われます。この祭りでは、京都の祇園祭のような「おかさ」と呼ばれる8基の笠鉦が、町中を練り歩きます。

熊野詣でをする巡礼者の彫刻。熊野本宮大社蔵。

紀伊半島の大自然の中に作られた熊野三山の大社は、「熊野本宮大社」、「熊野速玉大社」そして「熊野那智大社」から成っています。これらの大社は、熊野の土地に古代から存在した自然信仰にその起源を発しており、そのゆえ、いかに素晴らしい建築物であっても、それらは単に、大自然の持つ力に対する美しい飾りのようなものに過ぎないのかもしれない。これらの大社の建築物の中で、その主なもの12世紀に造られました。熊野本宮大社は、3つの大社の中でも最も重要な意味を持ちます。この大社の前には巨大な鳥居があり、訪れる人たちを圧倒します。熊野速玉大社は、巨大な岩の横に建てられており、この大社で、有名な火祭りが行われます。熊野那智大社は、日本で最も高い位置から流れる那智の滝の脇にあり、今日でも自然信仰のよりどころとなっています。